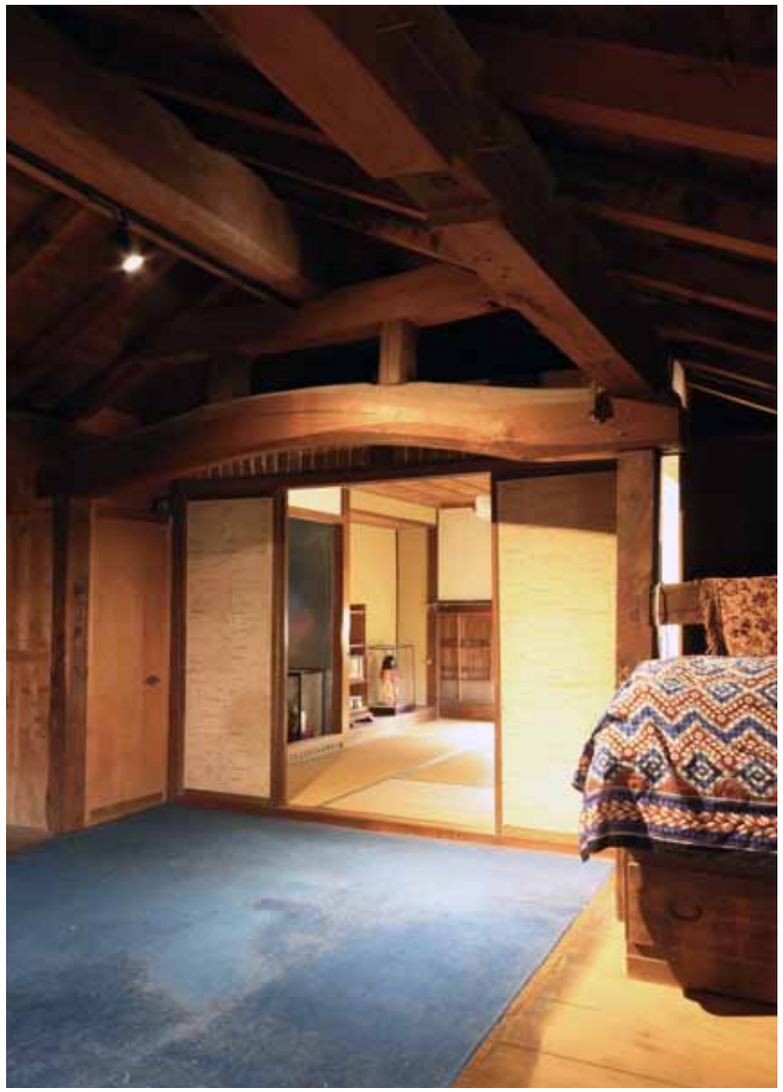
おじょんこ館

おじょんこ館
いわき市三和町上三坂字中町 86-1

発行　いわきと都市を結ぶ文化交流実行委員会
一般社団法人　OJONCO
製作　有限会社　伊藤寛アトリエ
発行日　2017 年 8 月 12 日
写真・イラスト／伊藤寛アトリエ提供
表紙文字・ロゴデザイン／湯浅美穂里

平成 29 年度福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）

OJONCO
おじょんこ館（旧石川醫院）
いわき市まち・未来創造支援事業



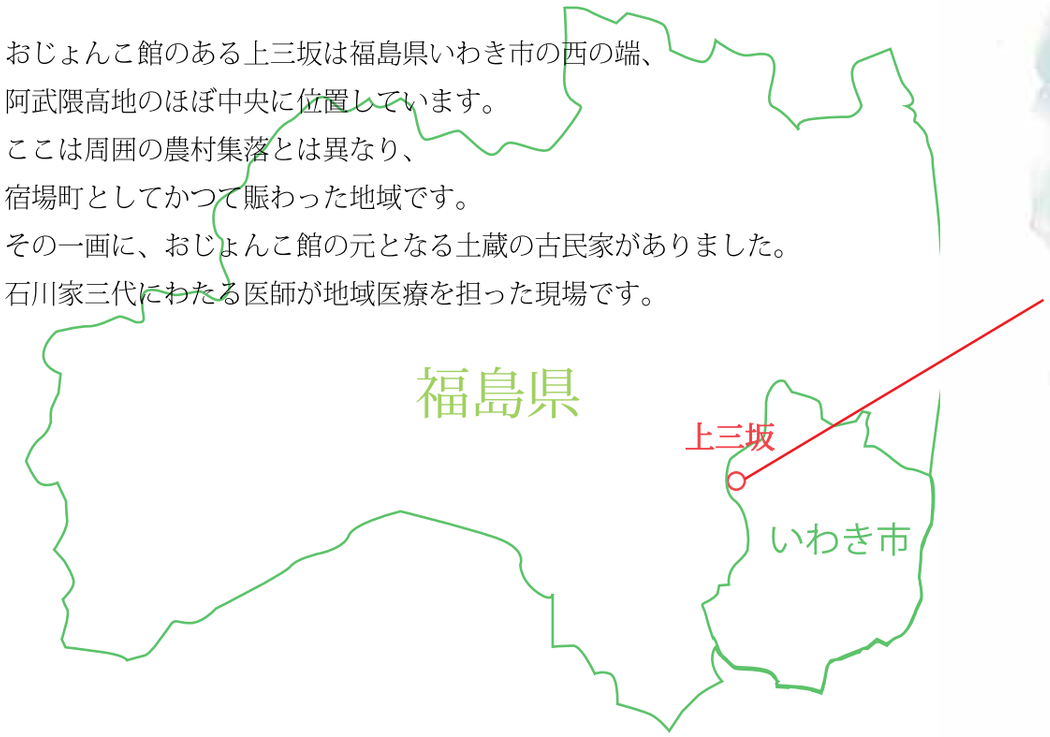
壁の裏は旧薬局
耐震補強のための
新たな柱や筋違い
開口部からは
草花が見える
間仕切りを撤去し、全面に
杉の厚板が張られた
42帖の大きさの一空空間
© 2016 ito hiroshi atelier

薬局のあった場所
出窓として使っている

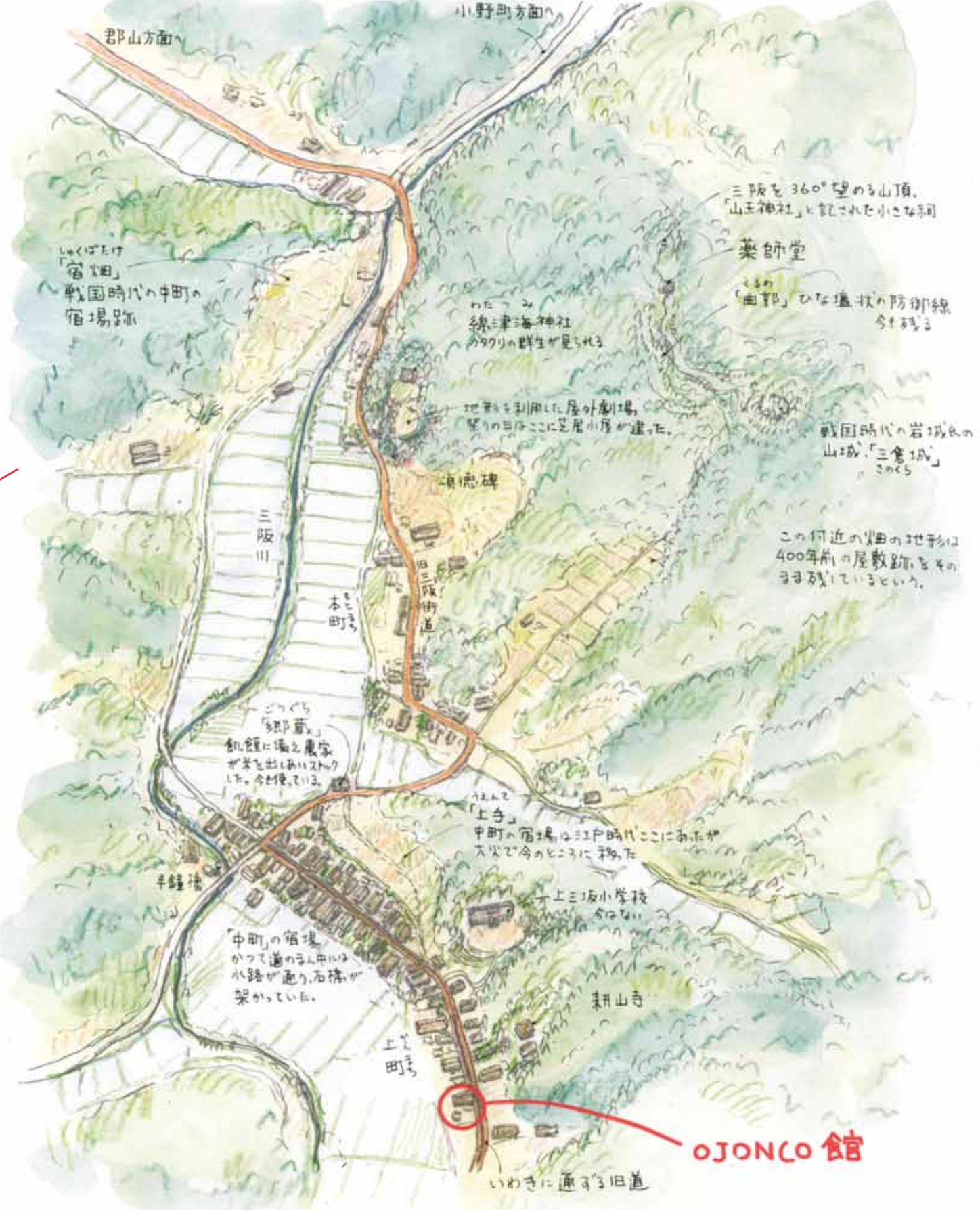
上三坂

かつての宿場町に残る古民家

おじょんこ館のある上三坂は福島県いわき市の西の端、
阿武隈高地のほぼ中央に位置しています。
ここは周囲の農村集落とは異なり、
宿場町としてかつて賑わった地域です。
その一画に、おじょんこ館の元となる土蔵の古民家がありました。
石川家三代にわたる医師が地域医療を担った現場です。



上三坂・中町の宿場にはかつて道の真ん中に水路が通り、石橋が掛かっていた。



設計

建築家　伊藤寛

1956 長野県生まれ／
２つの建築設計事務所勤務を経て
1986～88 早稲田大学大学院修士課程／
ミラノ工科大学留学／
1988 伊藤寛アトリエ設立／
現在、京都造形芸術大学大学院教授として
木造住宅の設計を教える

宿場町の再生

かつて宿場町として栄えた上三坂地区にもう一度にぎわいを取り戻そうと、2010 年に「再生 上三坂ホロスケの里」と言うタイトルの冊子をまとめた事がご縁で、上三坂地区にあった築 100 年の土蔵の家を交流施設 OJONCO 館として蘇らせる仕事に設計者として参加させて頂きました。

地元の人たちの記憶の中にあるこの旧石川邸を活かして、いわきと東京、地元の人たちの交流の場として役立てようと言おうものです。

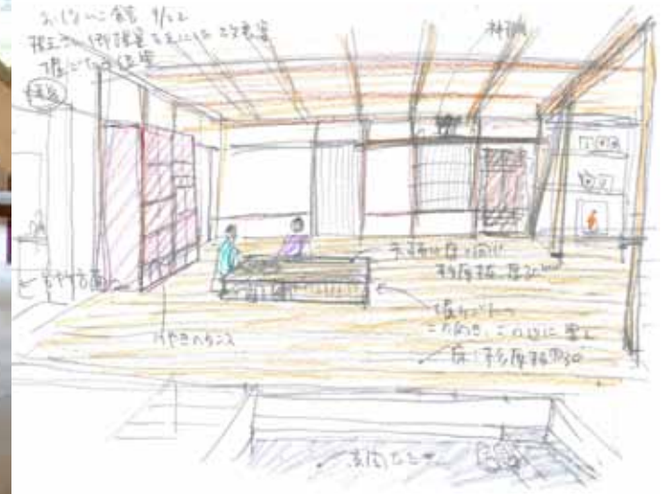
矢吹棟梁との打ち合わせ

100 年前の姿に

しかし、築 100 年の家の床は土台が腐り、床は波打っている状態でした。またこれまでの改修で壁を撤去してしまったために構造的な安定を大きく欠いており、その辺の補強が急務でした。住宅故の細かな間仕切や畳の床も大人数が会する空間としては不向きで、その辺りの改修をしながら高度成長時代の新建材等も全て取払い、かつての力強い木組みを目に見えるように現し、漆喰壁を補修し、土蔵の空間の気持ち良さを楽しめる様にしました。

施工は地元の矢吹工務店が引き受けてくれました。地元で木造の家をたくさん作って来た大工出身の矢吹棟梁と、関東からやって来た建築家は木材の太さに関する美学の違いは多少在ったとしても木を愛する気持ちは共通で、掛け合い漫才のようにお互いを尊重し知恵を出し合い、１つ１つの問題をクリアーしていきました。

一階は何にでも使える一室空間が出現しました。床は軟らかくて暖かい杉の厚板を一面に張りました。歩いたり座ったりした時の気持ち良さは格別で す。



アドバイザー

畑山　弘

はたやま　ひろむ
昌平橋 CM 研究会　代表理事
建築 PJ の施主が満足を公正に得られるよう
諸々のアド バイス、建築評論等を行う。
都庁の建築に長年携わった職員 OB が
建築、電気・機械・防災設備の専任で協働。
共著「現代学校建築集成」
「自治体庁舎建設の入札・契約方式早わかり」など

「記憶」を紡ぐリフォーム事業に結ばれた人びと

過去に出会ったような何か懐かしい潜在記憶も、源を辿ればより明確な根拠が浮かび上がるものです。修復の相談に預かった旧石川邸がそうでした。医師三代が地域医療を担った現場です。閉院後、空いたその古民家は、土蔵造りの母屋で待合いや薬局の設え、残された用具などにその息遣いを留めていました。あの震災前まで石川醫院を頼みとした人々が生きた証です。聞けば初代の医師誕生のいわれも、地域の願いや合力（ごうりき）の賜物と伝えられています。

そ の家は百年前に現在地に移築され、その後、増築もされています。しかし長い時や震災によるダメージは古民家を受け継いだ関係者や、上三坂の人々の理解を超えるものでした。

そこで、今後の復興支援や中山間地活性化拠点の必要最小限の修復構想となります。とは言え、それなりの出費です。そこで寄付集め以外に公的助成を調べようと助言しました。と・・あったのです、いわき市、まち・未来創造支援事業が。審査によっては上限５百万円の補助金が得られます。

私たちは地元の皆さんと当初練り上げた構想をブラッシュアップし、「地域資源を共有し、暮らし続けたくなる・・・」という市が提示するテーマで再構築しました。ここに旧石川邸を里山「記憶遺産」として地元・都市住民が協働する拠点づくり、老若男女、障碍をもつ人々にも使い易いリフォーム提案に結実し、幸いに審査もパスしたのは昨年春でした。

そこから設計・工事本番で新たな人々との出会いです。前出の設計の伊藤寛さん、地元工務店の矢吹棟梁と息子さんらの職人チーム、設備屋さんなど多彩な手で工事が始まります。さらに実施設計や工事着手後も様々な変更対応が必要です。その都度、予算や工期が限られている中で、皆さんには多くの知恵と努力を注いで頂きました。結果は、今期完成した“おじよんこ館”が総てを物語っていると思います。ハード上はまだ課題が残されていますが、計画的な対応が重要です。

“館”の敷地の西方には田園が開けています。東は間近な里山の斜面に隣家やその畑、花々が望めます。その前、“館”との間を昔にぎわったという街道が南北に通り抜けています。それぞれが一体となり地域の歴史を彷彿とさせる記憶遺産です。

看板

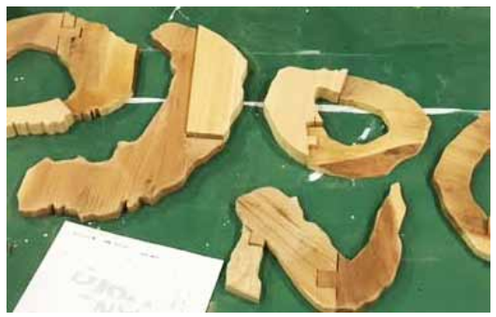
湯浅　美穂里

ゆあさ　みおり
1988 年　愛媛生まれ
武蔵野美術大学出身
舞台美術家
小劇場を中心に幅広く活動

新しい存在としての顔

看板というか表札というか、今回私が作らせていただいたのはその間のようなものでした。
布を継ぎ合わせて作るおじょんこをイメージした寄せ木風。文字は全体としては黒い色をしていますが単色の黒ではありません。バーナーであぶった黒からオイルをしみ込ませた黒まで色々で、木の種類も色々。近くで見るとかなり複雑で、そして１０年後は更に複雑な表情になりそうです。

建築家の伊藤さんや理事の根本さんと相談しながら、かつての石川醫院のように「おじょんこ館」が新しい交流の場として地元のみなさんに受け入れてもらえるような、そんなものができればと思いデザインしました。



人をつなぐ場所

子ども文庫

里山の物語

離れの書庫を子供たちに開いて本を楽しめるスペースにするという進行中の構想です

旧石川邸の離れは書斎として使われていましたが、その書庫には、医療をはじめ文学や趣味の書籍などが千冊以上、蔵書として残されています。これもまた、この地の記憶と歴史を物語る遺産のひとつです。この文化の一端を埋もれさせてしまうのは惜しい。むしろ、この離れと書庫、書籍を地域に開放し、それらの利活用をはかれないものか。「子ども文庫」の創設には、このようなささやかな願いがこめられています。

少子高齢化はいわき市の里山においても例外ではありません。長い歴史の中で育まれた豊かな文化が消えてしまう危惧。上三坂でも少子化によって、親から子へと大切に継承されてきた地域のしきたりや食文化が消えつつあるといいます。とはいえ、ここにはまだ、都会が失ってしまった里山の物語が息づいています。豊かな自然も、集落の伝統や文化、地域固有の民話などもたくさん残されています。そして、この「子ども文庫」が、上三坂の自然や歴史の文化遺産を受け継ぎながら、この里山の物語を蘇らせ、次世代へと継承する場所となるならば、それはわたしたちの喜びでもあります。

旧石川邸の離れを改修するにあたっては、書庫を開放的な空間にしたいと考えました。本棚には、数多くの児童書を揃えています。子どもは南向きのテラスへ建物から自由に出入りできます。床に腹ばいになってもよいし、あるいは寝転がってもよい。そこでは自由な精神で書物の世界に遊ぶことができます。また、今年の七月からは、上三坂の子ども会と「おじょんこキッズクラブ」を立ち上げました。民話や木工、郷土料理などに親しむ講座を「ＯＪＯＮＣＯ館」で開設します。講師は、地域の達人の方々。子どもたちが読書や体験活動によって互いに交流を深め、やがて「子ども文庫」の活動が次世代へと引き継がれるように願って。

OJONCO館 理事　齋藤　貢一

次世代につなぐ家

築 100 年の土蔵造り古民 OJONCO 館は、幕末のころ、三和町上三坂に流れついた青年武士に、先人たちが診療所 として提供した建物です。医師三代が続いた後、後継がなく、2011 年原発事故を 機に解体の危機に直面していました。この頃、首都圏在住 のいわき出身の女性たちが義援金活動を行う中、「使ってほしい」との石川家の意を受けて、2013 年有志 3 名で一般社団法人 OJONCO を設立し引継ぎました。

この古民家を拠点に、いわきと都市住民との交流を中心とした事業を開始したところ、福島にこころを寄せるボランティアや首都圏住民の来訪者が増え、住民との顔の見える交流が盛んにおこなわれるようになりました。

2016 年には、寄付金といわき市まち・未来創造支援事業 (ハード事業) の助成をうけて、懸案であった耐震補強、バリアフリー化、LED 省力 化が実現しました。子どもやお年寄り、障害を持つ方にも安全で快適に使っていただけるようになり、中山間地域医療 100 年の役割を終えた古民家が新たな地域交流スペースとして再生したのです。

本年 8 月 13 日 (日) OJONCO 館のお披露目を兼ねて、日本能楽界の第一人者である野村四郎先生による「能」ワークショップを開催する運びとなりました。前日 8 月 12 日 (土)「いわき芸術文化交流館アリオス」でいわき公演の開催決まりました。いわきは能の盛んな地域です。これを機に、能に親しむ催しが、OJONCO 館で定期的に開催されることを願っております。

戦乱を逃れてきた武士を受入れた上三坂の先人たちは、診療所 (現 OJONCO 館) を建て、二代目を 大学に通わせ、地域医療の維持に尽力し村人の暮らしを支えてきました。

このように人と歴史が交差する場所に育まれた文化を、いわきの魅力として次世代につないでいくことが求められていると考えています。その舞台としての OJONCO 館の存在と取組みを知っていただくため、ここに「おじょんこ」冊子をお届けするものです。

OJONCO 館代表　根本 敦子